

アート思考入門 (9)

アート思考は決まったメソッドがあるわけではないし、作品を見てすぐ感受性が養われるわけではない。しかし、アーティストがどのようにその作品を創り上げたのか、作品を見ながら考えることでアート思考に迫ることができる。その方法について紹介したい。

代表的な方法が、一つの作品について自由に感想を言い合う対話型鑑賞である。こうした催しがよく開かれる美術館などでは、意見を述べやすい近代の具象作品を扱うことが多い。アート思考で活用する際は現代アート作品を対象にした方がいいだろう。

連載で説明してきたように、現代アートはこれまでなかったコンセプトを提示する芸術である。作品を見て、アーティストが提示したコンセプトを想像してみることが、自分がコンセプトを創るうえでのトレーニングになる。

いろいろな作品を見ていると、着目した社会課題がストレートに伝わってくる作品もあれば、私たちの思いもよらない思考が大きく飛躍している作品もある。美術館であれば作品の解説が書かれている場合があり、何を意図して制作したかを確認することができる。最もいいのは、アーティストトークなどで、本人から説明してもらうことである。

今回写真を掲載した作品について、皆さんもコンセプトを考えてみてほしい。AKI INOMATA氏の

対話型鑑賞、創出過程を想像

「やどかりに『やど』をわたしてみる」という作品である。3Dプリンターで作った米ニューヨーク・マンハッタンを透明の「やど」。生きたヤドカリにこれを渡すと、自分の「やど」として使うようになる。

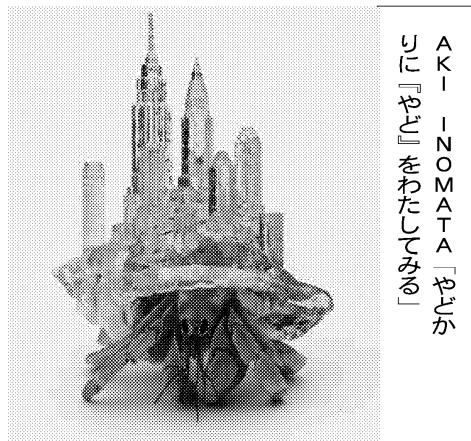
ある大学の経営学部の学生たちにこの作品を鑑賞してもらったところ、「都市が小さな生物に支えられているが、全てのものは見えないものに支えられている」「外から見ると違和感があることがわかるのに、自分では気がつかない」「マンハッタンが重そうに見える。多くのものを背負わされている現在に生きる人間を表している」といった意見が出た。学生らしく感性豊かな反応だった。

INOMATA氏がこの作品を制作する発端になったのは、2009年の在日フランス大使館（東京・港）の庁舎移転だった。隣の敷地に建てた新たな建物に移り、旧大使館があった土地は、フランス本国の領土と同じ扱いを受ける治外法権下から日本の法律の管理下となった。しかもこの土地は60年後に再びフランスの管理下になる取り決めになっている。

実はこの土地は定期借地権付きで分譲マンションの敷地として貸し出されたものだが、領土がフランスと日本の間で行き来しているようにも見える。この話を聞いたINOMATA氏は「平和的に領土が変わるのは珍しい」と興味を抱き、やどかりの作品を制作した。

この作品から領土の話の思いつくのはさすがに難しいが、コンセプトを聞くと、都市の形をした「やど」の意味が見えてくる。さらに、平和的に領土が変わるのは他にどんな場合があるかを調べていくと、新たな社会課題を見つけることも可能になるだろう。

対話型鑑賞で出てくる多様な意見、アーティストのコンセプトを聞くことで、それまで考えてもいなかったことに気付かされる。そして、自分が思考を飛躍させるときに、どのように事象を観察すればいいかを教えてくれる。



AKI INOMATA「やどかりに『やど』をわたしてみる」